

絶滅 (EX)**イソコモリグモ**

クモ目 コモリグモ科

Lycosa ishikariana (S. Saito, 1934)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 成体の体長は雌 15～23mm、雄 10～17.5mm。灰白色～褐色で、腹部には数対の黒斑がある。砂に縦穴の住居をつくる。
- ❖ 分布の概要 北海道及び本州の太平洋沿岸（青森県、茨城県）と日本海沿岸（青森県から島根県）に分布する。岩手県では田野畑村の明戸海岸に生息していた。
- ❖ 生息状況 砂浜海岸に生息する。田野畑村明戸海岸の個体群は、2011 年の東北地方太平洋沖地震に伴う津波で生息地が壊滅し、それ以降生息が確認されていない。
- ❖ 脅威 海岸の開発、工事。津波。車両の乗り入れ。
- ❖ 文献 1. 新海栄一（2017）、2. 谷川明男（2012）

(渡辺 修二)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)**選定要件 ②****ホンドワラジムシ**

ワラジムシ目 ナガワラジムシ科

Hondoniscus kitakamiensis Vandel, 1968

環境省 絶滅危惧Ⅰ類

- ❖ 形態 成体は体長 3 mm。平たい卵形、純白色で眼は退化する。第 2 触角は短く倒 L 字状、腹部に偽気管を欠く。山形県産の同属近縁種であるモガミワラジムシとは雄の第 1 腹肢と第 2 腹肢の形状により区別できる。
- ❖ 分布の概要 岩泉町、盛岡市に分布する。
- ❖ 生息状況 地下浅層に生息する。1968 年の発見時、龍泉洞の支洞で複数個体が採集されたが、工事による環境の変化により生息しなくなった。その後、洞外の地下浅層から採集された他、盛岡市でも採集された。
- ❖ 脅威 工事、開発による土壌の乾燥化。
- ❖ 特記事項 盛岡市で採集された個体は、岩泉町の個体と形態に少し違いがみられることから、各地域の個体群をそれぞれ維持する必要がある。
- ❖ 文献 3. Nunomura (1983)、4. 布村昇・上野俊一（2006）、5. Komatsu, Nunomura (2019)、6. 布村昇ほか（2021）

(渡辺 修二)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)**選定要件 ①②****ハルマンスナモグリ**

エビ目 スナモグリ科

Nihonotrypaea harmandi (Bouvier, 1901)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲と腹部は柔らかく、白く、つやがある。鉗脚は片側が大型化し、硬い。甲の前端から頸溝までの長さは甲全体の 2 / 3。体長は約 5.0cm に達する。ニホンスナモグリよりも目が大きく、眼柄の幅に対して目の幅は 1 / 2 程度。
- ❖ 分布の概要 北海道～九州の内湾の砂底に巣穴を掘って生息する。ニホンスナモグリよりも外海に近い場所を好む。
- ❖ 生息状況 2011 年 3 月の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波の後には、干潟を対象とした生物調査が続けられているが、記録されていない。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟の減少や津波等の攪乱。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 7. 松政正俊（2007）、8. 渡部哲也（2014）

(松政 正俊)

ニホンスナモグリ

エビ目 スナモグリ科

Nihonotrypaea japonica (Ortmann, 1891)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲と腹部は柔らかく、白く、つやがある。鉗脚は片側が大型化し、硬い。甲の前端から頸溝までの長さは甲全体の2/3（近縁のスナモグリでは3/4以上）。体長は約5.0 cmに達する。
- ❖ 分布の概要 北海道～九州の内湾の砂底・干潟に巣穴を掘って生息する。
- ❖ 生息状況 2011年3月の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波の後には、干潟を対象とした生物調査が続けられているが、公式な報告はない。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟の減少や津波等の攪乱。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 7. 松政正俊（2007）、8. 渡部哲也（2014）、9. Mukai（1992）

(松政 正俊)

ハウザワイソギンチャク

イソギンチャク目 ハウザワイソギンチャク科

Synandwakia hozawai (Uchida, 1932)

環境省 なし

- ❖ 形態 直径0.5～1 cm程度、伸張時の長さ5～6 cmに達する埋在性のイソギンチャク類。生時の体色は薄い黄褐色～灰褐色で、体色が薄い部分では隔膜が白い縦縞に見える。口盤には28～80本の触手があり、生時には触手の基部に白いスポットが確認できる。体の下方末端には円盤状の足盤はなく、球状の底球が発達する。
- ❖ 分布の概要 宮古市津軽石川河口左岸の防潮堤側に河川と隔てられて形成された水路部および陸前高田市小友浦の潮間帯下部に分布する。
- ❖ 生息状況 内湾域の干潟や浅海域の泥中深くに存在する貝殻等の硬い基質に付着して生息し、冠水時には触手環を底質上に開く。津軽石川河口の水路部では2013年および2018～2020年に、小友浦では2018～2021年に記録されている。
- ❖ 脅威 三陸沿岸では海底が泥質からなる干潟や浅海域は少なく、本種の生息に適した場所は限られる。宮古市津軽石川河口の水路部では、2021年夏に海との接続部が浅くなって閉塞したことで塩分が大幅に低下して淡水の影響を強く受けるようになり、本種の生息も2021年以降は確認されていない。小友浦では、2020年8月から2021年3月にかけて既存の干潟の全面に震災復興工事の残土を投入してスロープ状にならして覆砂する形での人工干潟の造成工事が行われており、2021年には本種の生息が確認できたものの、その後本種の生息は確認できていない。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか（2020a）、11. 阿部博和ほか（2020b）、12. 阿部博和ほか（2020c）

(阿部 博和)

オイワケゴカイ

サシバゴカイ目 ゴカイ科

Namanereis littoralis (Grube, 1872) species group

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 2 cm 程度の小型の多毛類。体色は白色から淡黄色。吻に顎片はない。触糸は 3 対で、いずれも短い。疣足に背足枝はなく、腹足枝のみが発達する。背触糸は円錐形。腹足枝に針状複剛毛と短複剛毛を持つ。
- ❖ 分布の概要 県内の記録は、広田湾小友浦の潮間帯で 2016 年 8 月 6 日に採集された 1 例のみである。近隣では青森県芦崎や宮城県長面浦からの記録がある。国内では北海道から沖縄までの各地に分布する。
- ❖ 生息状況 内湾の干潟の満潮線付近の石裏からイソミミズ類とともに見つかることが多い。同様の環境を好むスナイソゴカイ等よりもやや高所に生息する。淡水の影響を受ける場所にも生息する。
- ❖ 脅威 内湾や河川の満潮線付近は沿岸開発によって消失しやすい場所であることから、本種の生息環境は急速に破壊されている可能性が高い。小友浦では、2020 年 8 月着工の人工干潟の造成工事以降、本種の生息は確認できていない。
- ❖ 特記事項 本種は北海道忍路湾で採集された個体に基づき *Lycastopsis augeneri* として新種記載されたが、のちに、ブラジルをタイプ産地とする *Namanereis littoralis* と形態的に区別できないという理由から *N. littoralis* species group に含められた。
- ❖ 文献 13. 環境省自然環境局生物多様性センター (2007)、14. 環境省自然環境局生物多様性センター (2017)、15. 菅孔太郎ほか (2023)

(菅 孔太郎)

イトメ

サシバゴカイ目 ゴカイ科

Tylorrhynchus osawai (Izuka, 1903)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 体長は、未成熟個体で約 25 cm、バチと呼ばれる生殖型で約 13 cm。背面中央の血管とその左右に沿ってみられる白い模様がよく目立つ。吻には肉質突起を有し、顎片を欠く。背足枝の剛毛束はすべて針状複剛毛で、腹足枝には針状複剛毛と短複剛毛を持つ。
- ❖ 分布の概要 県内では、宮古湾津軽石川河口、大槌湾鶴住居川河口、広田湾古川沼の潮間帯からの記録、および久慈湾久慈川河口での採集例がある。近隣では宮城県の北上川河口が本種の一大産地となっている。国内では北海道から九州中部までの汽水域に比較的普通にみられる。
- ❖ 生息状況 汽水域の幅広い塩分環境下に生息しており、高潮帯のヨシ原の根元などの砂泥底に穴居する。降河回遊型の生活史を持ち、主に 10～12 月の大潮の日没後満潮直後に生殖群泳を行い、初期発生は高塩分環境下で進行する。
- ❖ 脅威 干潟の埋め立てや河川の護岸工事などにより生息場所が全国的に減少している。鶴住居川河口干潟は県内における一大産地であったが、2021 年の東北地方太平洋沖地震に伴う巨大津波とその後の防潮堤工事により、その生息地の大部分が消失した。局所的に残された生息地においても、今後の個体数の減少が懸念される。
- ❖ 特記事項 本種は、1903 年に東京の隅田川などで採集された標本に基づき新種記載された。その後、*Tylorrhynchus heterochaetus* のシノニムとされてきたが、吻上の肉質突起の数に違いがあることなどから、1996 年に「osawai」の種小名が復活された。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか (2020a)、12. 阿部博和ほか (2020c)、13. 環境省自然環境局生物多様性センター (2007)、16. Kinoshita, Matsumasa (2016)、17. 松政正俊ほか (2023)

(菅 孔太郎)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ①②

イリエノギスピオ

スピオ目 スピオ科

Atherospio aestuarii Abe and Kan, 2022

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 1 cm 程度の小型の多毛類。頭部には 2 対の暗赤色の眼点が台形に並び、その側後方から 1 対の副感触手が生じる。第 5 剛毛節の腹足枝では芒状剛毛が前後に近接して垂直に 2 列並ぶ。腹足枝の被囊鉤状剛毛は第 16～19 剛毛節から生じる。体後部の数剛毛節の背足枝では、他の剛毛より太くて長い針状剛毛の束が生じる。鰓は第 7 剛毛節から第 18～23 剛毛節まで生じ、背足枝後足葉と完全に融合する。
- ❖ 分布の概要 陸前高田市小友浦の潮間帯で 2017 年、2018 年、2020 年の 8 月にそれぞれ 1 個体が採集された。本種は日本国内のみで知られる種であり、岩手県以外では三重県英虞湾、鹿児島県屋久島から知られるのみである。
- ❖ 生息状況 スピオ科多毛類では同種個体と同じ場所に多数生息することが多く、本種も、英虞湾や屋久島の個体群では同じ場所で複数個体が採集されているが、小友浦では偶然採集される程度であり、生息数は多くないと考えられる。小友浦では、2020 年 8 月から 2021 年 3 月にかけて既存の干潟の全面に震災復興工事の残土を投入してスロープ状にならして覆砂する形で的人工干潟の造成工事が行われており、この工事の後は、本種の生息は確認できていない。
- ❖ 脅威 粘土・シルトと礫に富む静穏な入り江状の干潟や浅海域を好んで生息していると考えられ、特殊な環境条件要求性を持ち、生息地改変の影響を強く受けやすい可能性がある。
- ❖ 特記事項 岩手県産標本をパラタイプとして 2022 年に新種として記載された（タイプ産地は屋久島）。
- ❖ 文献 18. Abe, Kan (2022)

(阿部 博和)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ①②

オミナエシフサゴカイ

フサゴカイ目 フサゴカイ科

Neoamphitrite sp.

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10cm 程度の大型の多毛類。生時の体色は赤褐色で、口触手は淡黄色。3 対の叉状分岐した鰓と 13 対の腎管を持つ。背剛毛は第 4 体節以降の約 20 節に存在する。腹剛毛は第 5～10 体節で 1 列、第 11 体節以降の約 14 節で 2 列、それ以降で 1 列に並ぶ。
- ❖ 分布の概要 県内における採集例は、広田湾小友浦の低潮線付近で 2020 年 8 月 4 日に採集された 1 例のみである。近隣では宮城県の女川湾と松島湾からの記録がある。この他に、国内からは瀬戸内海（周防灘およびハチの干潟）、鹿児島湾（知林ヶ島）からの記録がある。
- ❖ 生息状況 内湾の潮間帯や水深数メートルの潮下帯に生息している。泥をかためた柔らかい棲管を造り、人頭大ほどの転石の下面に付着して生活している。
- ❖ 脅威 内湾に点在する砂泥混じりの転石帯を好むと考えられるが、そのような場所は概して小規模であり、埋め立て等の影響を受けやすいことから、本種の生息域も縮小している可能性が高い。小友浦では、2020 年 8 月着工の人工干潟の造成工事以降、本種の生息は確認できていない。
- ❖ 特記事項 最近の研究によって、本種がこれまで *Amphitrite rubra*（タイプ産地：地中海）や *Neoamphitrite vigintipes*（紅海）と混同されてきたことが明らかになり、現在その分類学的な見直しが行われている。
- ❖ 文献 19. 菅孔太朗 (2022)、20. Okuda (1937)、21. Okuda, Yamada (1954)

(菅 孔太朗)

オクダウミイサゴムシ

フサゴカイ目 ウミイサゴムシ科

Pectinaria okudai (Imajima and Hartman, 1964)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 2 cm 程度の小型の多毛類。滑らかに砂粒が敷き詰められた角笛状の棲管を作り、棲管の長さは 6 cm に達する。頭部には黄金色の棘状剛毛が 1 列に並び、頭頂膜と頭頂板は融合しない。第 3、第 4 体節にはそれぞれ 1 対の鰓がある。第 5～20 体節 (=第 1～16 剛毛節) には背足枝 (16 対)、第 8～19 体節 (=第 4～15 剛毛節) には腹足枝 (13 対) が発達し、それぞれ針状剛毛と櫛状剛毛を備える。
- ❖ 分布の概要 宮古市津軽石川河口左岸の防潮堤側に河川と隔てられて形成された水路部に分布する。
- ❖ 生息状況 海底が泥質からなる静穏な干潟や浅海域を好んで生息していると考えられ、淡水の影響を受ける場所にも生息する。岩手県では宮古市津軽石川河口の水路部という極めて限られた場所でのみ確認されている。
- ❖ 脅威 三陸沿岸では海底が泥質からなる静穏な干潟や浅海域は少なく、本種の生息に適した場所には限られる。本種が唯一確認されている宮古市津軽石川河口の水路部は、河川とは直接には繋がっていないが防潮堤の工事の進行とともに上流部から淡水が流入するようになり、2021 年夏には海との接続部が浅くなって閉塞したことで淡水の影響を強く受けるようになった。そのため、2022 年以降はこれまで生息していた多くの種が姿を消し、本種の生息も 2021 年以降は確認されていない。
- ❖ 特記事項 本種はこれまで西日本を中心に記録されていたが宮古市津軽石川河口の水路部で 2019 年に初めて記録されたことで、分布の北限が大きく更新された。現在では宮城県複数の地点でも本種の生息が確認されている。
- ❖ 文献 12. 阿部博和ほか (2020c)

(阿部 博和)

ワスレナグモ

クモ目 ジグモ科

Calommata signata Karsch, 1879

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成体の体長は雌 13～18mm、雄 5～8 mm。雌は褐色で大きなアゴを持つ。雄は黒色。やや乾燥した草地や庭の植え込みの間等に、糸で裏打ちした縦穴の住居をつくる。
- ❖ 分布の概要 本州、四国、九州に分布する。岩手県では大船渡市、陸前高田市の狭い範囲に生息地がある。奥州市の生息地は工事により失われた。
- ❖ 生息状況 大船渡市の生息地は数か所あるが、陸前高田市では生息範囲が極めて限られている。
- ❖ 脅威 開発、工事。
- ❖ 文献 1. 新海栄一 (2017)、22. 新海明ほか (2022)、23. 多田野恒治 (1980)、24. 渡辺修二 (2021)

(渡辺 修二)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ②

カネコトタテグモ

クモ目 カネコトタテグモ科

Antrodiaetus roretzi (L. Koch, 1878)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 成体の体長は雌 12～18mm、雄 9～13mm。頭胸部は黒色、腹部は褐色。山地や樹林の傾斜地に横穴の住居をつくり、入口に両開きの扉を付ける。
- ❖ 分布の概要 本州の岩手県から兵庫県にかけて分布する。
- ❖ 生息状況 一関市の一か所だけで生息が確認されている。その他、奥州市で 1 件の採集記録がある。
- ❖ 脅威 開発、工事。
- ❖ 文献 1. 新海栄一 (2017)、22. 新海明ほか (2022)、25. 八木沼健夫・新海栄一 (1977)、26. 国土交通省 河川水辺の国勢調査 河川環境データベースシステム

(渡辺 修二)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ②

アッカホラヒメグモ

クモ目 ホラヒメグモ科

Nesticus breviscapus Yaginuma, 1979

環境省 なし

- ❖ 形態 雌成体は体長約 4.5mm。背甲は黄褐色、腹部は灰色～褐色で、背面に数対の暗色紋があり、個体により濃淡がある。外雌器は突出しない。
- ❖ 分布の概要 主に岩泉町に分布する。他のホラヒメグモ同様、同属他種とは分布域が重ならない。
- ❖ 生息状況 好洞穴性。主として石灰岩洞穴内に生息する。このほか、野田村玉川では洞外での採集記録がある。分布域は局限されるが、個体数が比較的高い洞穴がある。
- ❖ 脅威 道路工事や山林の開発による、生息地（洞穴）の消失や乾燥等の環境変化。
- ❖ 特記事項 岩手県において、*Nesticus* 属はアッカホラヒメグモ、イワテホラヒメグモ、ヒノデホラヒメグモの 3 種が報告されている。このほか、これらの分布域以外から未同定の個体が採集されている。
- ❖ 文献 27. Yaginuma (1979)

(渡辺 修二)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ②

イワテホラヒメグモ

クモ目 ホラヒメグモ科

Nesticus iwatensis Yaginuma, 1979

環境省 なし

- ❖ 形態 成体の体長は 5～6.5mm。アッカホラヒメグモによく似るがやや大型、背面の暗紋は色が濃く黒色に近い。外雌器は長く突出し、先端は裁断されたように直線的。
- ❖ 分布の概要 北上山地の宮古市から大船渡市にかけて分布する。他のホラヒメグモ同様、同属他種とは分布域が重ならない。
- ❖ 生息状況 好洞穴性。主として石灰岩洞穴内に生息する。早池峰山や大船渡市上甲子では洞外での採集記録がある。分布は局限されるが、個体数が比較的多い洞穴がある。
- ❖ 脅威 道路工事や山林の開発による、生息地（洞穴）の消失や乾燥等の環境変化。
- ❖ 特記事項 岩手県において、*Nesticus* 属はアッカホラヒメグモ、イワテホラヒメグモ、ヒノデホラヒメグモの 3 種が報告されている。このほか、これらの分布域以外から未同定の個体が採集されている。
- ❖ 文献 27. Yaginuma (1979)、28. 八木沼健夫 (1986)

(渡辺 修二)

ヒヌマヨコエビ

ヨコエビ目 キタヨコエビ科

Jesogammarus (Jesogammarus) hinumensis Morino, 1993

環境省 なし

- ❖ 形態 オオエゾヨコエビ属 *Jesogammarus* の中で、第1触角柄部第1節末端部に棘状刺毛を、大顎髯の第1節に1本の棘状刺毛を備え、第3尾肢の内肢は外肢の1/4よりも短く、外肢内側縁に複数の羽状刺毛を備え、尾節板の長さは最大幅よりも長いという点で本種に同定される。
- ❖ 分布の概要 青森県以南の本州・四国・九州、および韓国の済州島から記録されており、岩手県内では山田町・織笠川河口域、釜石市・鶴住居川河口域からの報告がある。
- ❖ 生息状況 塩分が低い感潮河川の上部や汽水湖等の落ち葉などリターの下に生息する。
- ❖ 脅威 東北地方太平洋沖地震・津波による影響を強く受け、護岸工事等の人為的な環境改変の影響を受けやすい。
- ❖ 特記事項 岩手県内においては東日本大震災後の公式な報告はない。
- ❖ 文献 29. Morino (1993)、30. 山田宇宙ほか (2021)

(松政 正俊)

ハマダンゴムシ

ワラジムシ目 ハマダンゴムシ科

Tylos granuriferus Budde-Lund, 1985

環境省 なし

- ❖ 形態 体は楕円形で、体長は成体で1.5~2.0cmに達する比較的大型の半陸生種である。日本では本科・本属唯一の種である。オカダンゴムシ科と外見が類似するが、本種では尾肢が左右から腹肢を覆う。体色は灰色、緑色、橙色などの個体変異に富み、白の斑紋を持つものが多い。
- ❖ 分布の概要 東アジア固有種で、日本では北海道から琉球列島にかけての人為的な影響が少ない砂浜海岸の潮間帯上部から潮上帯に見られる。
- ❖ 生息状況 日中は砂中に潜っていることが多く、夜間に地表に現れて打ち上げられた海藻や魚体などを摂食する。人の出入りの多い海岸や道路に近い砂浜には生息しないことが報告されている。
- ❖ 脅威 人為的な影響が少なく、陸域への連続性が保たれている砂浜海岸の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか (2020a)、12. 阿部博和ほか (2020c)、31. Nunomura (1990)、32. 佐藤あかりほか (2005)、33. 菊川章 (2020)

(松政 正俊)

キタノスジエビ

エビ目 テナガエビ科

Palaemon septemtrionalis Katogi et al., 2019

環境省 なし

- ❖ 形態 スジエビに酷似するが、本種の第2胸脚前節が腕節よりも長く（前節／腕節＞1）、顎角長や顎角下縁歯数などに差異が認められる。しかし、新種記載の根拠ともなった胸脚各節の比は対サイズによって変動するため厳密な判断基準とは言えない。
- ❖ 分布の概要 久慈市から陸前高田市にかけて、三陸沿岸の広範囲にわたってやや不連続に分布する。
- ❖ 生息状況 河川下流域（塩水が及ぶ範囲）から河口域に主に生息する。個体数は生息地によって異なるが、場所によっては多数の個体が認められる。回遊性の生活を送るが、幼生は沖合に出ることなく、河口近辺で初期成長した後河川生活に移ると考えられる。
- ❖ 脅威 河口域の人為的な改変や波浪による河口閉塞は脅威となる。近年の集中的降雨にともなう出水によって大量の土砂が河口域に堆積して生息域が狭められる懸念も大きい。
- ❖ 特記事項 本種は、従来のスジエビから主に遺伝分析結果と形態差により宮城県産標本をもとに2019年新種記載された。三陸沿岸から日本海側（北海道・本州）にかけて遺伝的にまとまった集団（クレードBⅠ）として分布するが、北上川・旧北上川河口、牡鹿半島（宮城県）以南には遺伝的にかなり異なる集団（クレードBⅡ：未記載種と思われる）が分布する。
- ❖ 文献 17. 松政正俊ほか（2023a）、34. 張成年ほか（2018a）、35. 張成年ほか（2018b）、36. Katogi et al. (2019)、37. 張成年ほか（2019）、38. 武田真城・池田実（2022）

(竹内 基)

テッポウエビ

エビ目 テッポウエビ科

Alpheus brevicristatus de Haan, 1844

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は、顎角両端の眼を覆う。鉗脚は片側が巨大化し、硬く破裂音を発する。体長は約7.0cmに達する。体色は緑褐色のまだら模様で、明瞭な縞模様は見られない。
- ❖ 分布の概要 東アジア沿岸域に広く分布し、日本では北海道忍路湾以南。岩手では広田湾・小友浦において記録されている。
- ❖ 生息状況 干潟の滞筋やアマモ場などで見られる。底質に奥行き数十cmほどの巣穴を掘り、生息する。巣穴にはハゼ類が共生する。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟や藻場の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 8. 渡部哲也（2014）、11. 阿部博和ほか（2020b）、39. 松政正俊（2016）

(松政 正俊)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ②

テッポウエビ属の 1 種

エビ目 テッポウエビ科

Alpheus sp.

環境省 なし

- ❖ 形態 鉗脚は片側が巨大化し、大きな個体で体長は約 5.0cm に達する。頭胸甲から尾部にかけて、うすいオレンジ色の地に濃褐色の縞模様が頭胸甲に 2 本、各腹節および尾部の後部に 1 本ずつ見られる。このような縞模様をもつ個体は“イソテッポウエビ (*Alpheus lobidens* de Haan, 1849) 近似種”等と呼ばれることが多いが、未記載種も多く同定は困難である。
- ❖ 分布の概要 テッポウエビ属は熱帯から温帯の温暖な地方の浅海に分布する。同属のテッポウエビ (*Alpheus brevicristatus*) は最も冷温な地方まで分布する。岩手では広田湾・小友浦において確認されている (未発表)。
- ❖ 生息状況 広田湾・小友浦では砂泥質の干潟に巣穴を掘って生息している。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 8. 渡部哲也 (2014)、40. 有山啓之 (2017)

(松政 正俊)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ②

バルスアナジャコ

エビ目 アナジャコ科

Upogebia issaeffi (Balss, 1913)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲と腹部は軟弱。第一胸脚が不完全な鉗脚となっている。体色は茶褐色。アナジャコに似るが、本種の鉗脚の可動指には短い線状の隆起が 4 本以上あり、不動指に歯状突起がある。
- ❖ 分布の概要 岩手県では広田湾・小友浦において記録されている。
- ❖ 生息状況 転石干潟や礫干潟に多いとされ、底質に巣穴を掘って生息する。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか (2020a)、41. Matsumasa, Kinoshita (2016)

(松政 正俊)

準絶滅危惧 (NT)

選定要件 ①②

マメコブシガニ

エビ目 コブシガニ科

Pyrhila pisum de Haan, 1841

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は半球形で、非常に硬い。腹部も硬く、白い。甲と鉗脚の表面は小さい顆粒で覆われている。額の中央がややくぼみ、2 歯を認める。甲幅は約 2.0cm に達する。体色は茶褐色、黄褐色の不規則な濃淡模様。横歩きではなく、前進する。
- ❖ 分布の概要 韓国や中国北部からも報告ある。日本では岩手県以南、奄美大島までの干潟や内湾の砂泥底とされている。
- ❖ 生息状況 2011 年 3 月の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波の後には、干潟を対象とした生物調査が続けられているが、報告は皆無である。
- ❖ 脅威 生息場所となる干潟の減少や津波等の攪乱。
- ❖ 特記事項 千葉県以西の 7 つの県では、準絶滅危惧種や絶滅危惧 II 類に指定されている。
- ❖ 文献 8. 渡部哲也 (2014)、42. 峯水亮 (2016)

(松政 正俊)

アカテガニ

エビ目 ベンケイガニ科

Chiromantes haematocheir (de Haan, 1833)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は四角形で滑らかであり、中心に明確な H 型の溝がある。甲幅は約 4.0cm に達する。眼窩外歯の後方に歯はない。鉗脚は赤色で、指部は白ないしは黄色。体色は幼体や雌では茶褐色の個体が多いが、成体雄では緑褐色で、頭胸甲前側が赤や黄色～黄褐色を帯びる。
- ❖ 分布の概要 韓国、中国、台湾から知られる東アジア固有種で、日本では本州から九州にかけて分布する。
- ❖ 生息状況 潮間帯上部から潮上帯の河岸の土手の石積みの間隙や草地・林に巣穴を形成して生息。稚ガニは潮間帯の中上部で見つかることが多い。夏の大潮前後に河口や海岸で放仔（ゾエアの放出）することが知られている。岩手県内にも生息地が点在するが、それぞれの場所での密度は高くない。
- ❖ 脅威 生活史を完結するために必要な、水域から陸域への連続性が良好に保たれた生息環境の減少。
- ❖ 特記事項 全国的にも個体数が減少しており、宮城県、千葉県などの 9 県が準絶滅危惧等に指定している。
- ❖ 文献 17. 松政正俊ほか (2023a)、43. 松政正俊 (2019)、44. 豊田幸詞 (2019)、45. 松政正俊ほか (2023b)

(松政 正俊)

クロベンケイガニ

エビ目 ベンケイガニ科

Orisarma dehaani (H. Milne Edwards, 1853)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は四角形で滑らかで、幅は約 4.2cm に達する。眼窩外歯の後方に歯はないか、あっても痕跡的。鉗脚は多数の大きな顆粒で覆われ、歩脚に長い剛毛が多数ある。体色は褐色や茶褐色あるいは黒褐色で、頭胸甲前部や鉗脚は紫色を帯びる。
- ❖ 分布の概要 韓国、中国、台湾から知られる東アジア固有種で、日本では本州から南西諸島にかけて分布する。岩手県では 2019 年に初めて確認された。
- ❖ 生息状況 河川の河口から感潮域の上流部のヨシ原、草地、土手に巣穴を形成して生息。アカテガニよりは潮間帯の低い場所に見られる。岩手県内での生息地は極めて限定的である。
- ❖ 脅威 本種の生息域は、津波や水門建設等の人為的影響を受けやすい。
- ❖ 特記事項 生息地が限定されている。
- ❖ 文献 17. 松政正俊ほか (2023a)、43. 松政正俊 (2019)、44. 豊田幸詞 (2019)、45. 松政正俊ほか (2023b)

(松政 正俊)

アシハラガニ

エビ目 モクズガニ科

Helice tridens (de Haan, 1835)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲はやや幅広の四角形で、甲幅は約 3.5cm に達する。眼窩外歯の後方に明瞭な 2 つの前側縁と痕跡的な 1 歯がある。鉗脚は成体雄で強大。体色は淡緑褐色～暗緑褐色で、額の前縁から前側縁にかけては黄色や橙色で縁取られる。大型個体では緑色が強くなる。
- ❖ 分布の概要 日本では青森から種子島の潮間帯。国外では韓国での記録があり、東アジア固有種と考えられている。
- ❖ 生息状況 河口・汽水域のヨシ原やその前面の干潟に巣穴を形成して生息する。干潮時に巣穴から出て活動し、夏には干潟域に出て採餌活動等を示す。近年、岩手県内における個体数は増えているが、生息地は限定されている。
- ❖ 脅威 本種の生息が確認されている河口・汽水域のヨシ原は限定的であり、かつ埋め立て等の人為的な影響を受けやすい。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか (2020a)、12. 阿部博和ほか (2020c)、39. 松政正俊 (2016)、41. Matsumasa, Kinoshita (2016)、43. 松政正俊 (2019)、44. 豊田幸詞 (2019)、45. 松政正俊ほか (2023b)

(松政 正俊)

トリウミアカイソモドキ

エビ目 モクズガニ科

Sestrostoma toriumii (Takeda, 1974)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 頭胸甲は丸みを帯びた正方形で、円形に近い。甲の側縁は完縁で表面が平滑であり、額の中央がややくぼむ。甲幅は成体でも約 0.7cm 程度の小型種で、歩脚の先端が鋭い。体色は茶褐色、黒褐色、赤褐色と多様である。歩脚に斑紋があり、動いていると脚が目立つ。
- ❖ 分布の概要 青森県から西表島の砂質干潟。岩手県内では広田湾・小友浦から報告されている *Sestrostoma* sp. は本種と思われる。
- ❖ 生息状況 甲殻類のアナジャコ類やスナモグリ類の巣穴に共生する。
- ❖ 脅威 アナジャコ類やスナモグリ類が生息する干潟に限られ、かつ生息密度が低い。
- ❖ 特記事項 全国的にも報告例は少なく、生息が確認された場合も密度は低い。日本ベントス学会において準絶滅危惧種、宮城県では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。
- ❖ 文献 8. 渡部哲也 (2014)、11. 阿部博和 (2020b)、46. 伊谷行 (2012)、47. 和田恵次 (2017)

(松政 正俊)

アリアケモドキ

エビ目 ムツハアリアケガニ科

Deiratonotus cristatum (de Man, 1895)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は横長の六角形で、甲の中央部・心域から鰓域にかけて明瞭な隆起が横に走る。甲幅は 2.0 cm に達する。眼窩外歯の後方に歯はない。成熟した雄の鉗脚は雌よりも太い。体色は淡褐色～茶褐色で、雌雄ともに腹部に朱色や橙色が混じる。
- ❖ 分布の概要 サハリン、中国、韓国、ベトナムから報告があり、東アジア固有種と考えられている。日本では北海道から沖縄島の各地の内湾の干潟から感潮域の上部にかけて見られるが、比較的塩分が低い貧鹹水域も泥質干潟において密度が高い。
- ❖ 生息状況 ヨシ原が発達する干潟の潮間帯下部に形成された巣穴や石の下に見られることが多く、主に水中で活動するが、干出した泥質干潟の表面で活動していることもある。
- ❖ 脅威 ヨシ原を伴うの貧鹹水域の泥質干潟の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 7. 松政正俊 (2007)、10. 阿部博和ほか (2020a)、12. 阿部博和ほか (2020c)、16. Kinoshita, Matsumasa (2016)、44. 豊田幸詞 (2019)、47. 和田恵次 (2017)、48. Kawamoto *et al.* (2012)

(松政 正俊)

スナガニ

エビ目 スナガニ科

Ocyrode stimpsoni Ortmann, 1897

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸部は立方体に近く、成体の大型個体で甲幅 3.0cm 程度となる半陸生種である。左右の鉗脚のいずれかが大きい。両眼の先端に角状突起はなく、甲背面後部に 2 つの白斑紋を持つこと、鉗脚内面に顆粒列が見られることなどから国内に生息するその他のスナガニ類（ツノメガニ、ナンヨウスナガニ、ミナミスナガニ）と区別される。
- ❖ 分布の概要 琉球列島などの熱帯・亜熱帯域を除く、北海道南部以南の日本全国の温帯域。人為的な影響が少ない砂浜海岸の潮間帯上部に見られる。
- ❖ 生息状況 砂浜に巣穴を形成して生息する半陸生のガニである。干潮時に地表に現れて打ち上げられた海藻や動物の遺骸や小動物などを摂食・捕食する。人の出入りの多い海岸や道路に近い砂浜には生息個体数が減少することが知られている。
- ❖ 脅威 人為的な影響が少なく、生息に適した奥行きのある砂浜海岸の減少。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 12. 阿部博和ほか (2020c)、16. Kinoshita, Matsumasa (2016)、43. 松政正俊 (2019)、45. 松政正俊ほか (2023b)、49. 渡部哲也ほか (2018)、50. 若林郁夫 (2019)、51. 環境省自然環境局生物多様性センター (2022)

(松政 正俊)

ジャムシ

サシバゴカイ目 ゴカイ科

Alitta dyamusi (Izuka, 1912)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 90cm に達する大型の多毛類。生時の体色は濃褐色もしくは濃緑色で、前口葉の背面後方には横長の白い斑紋が一個ある。吻には 8 区域すべてに円錐形の顎片を持つ。体後部疣足の上足葉は大きく葉状。背足枝の剛毛束はすべて針状複剛毛で、腹足枝には針状複剛毛と短複剛毛を持つ。
- ❖ 分布の概要 県内では、宮古湾津軽石川河口、広田湾小友浦、山田湾織笠川河口の潮間帯からの採集例がある。大槌湾では放精放卵のために夜間に水中に泳ぎ出る行動（生殖群泳）が確認されている。北方種で、国内では北海道から宮城県南三陸沿岸にまで分布する。
- ❖ 生息状況 潮間帯および潮下帯の砂泥底に穴居する。淡水の影響を受ける河口周辺の干潟にも出現する。これまでに県内の干潟から採集された個体は概ね体長 30cm 未満と比較的小型であることから、本種の大型個体は潮下帯に生息していると思われる。成熟した雌雄は 5～6 月の夜間に生殖群泳を行い、孵化後の幼生は 1 週間程度の浮遊生活を経てから底生生活に移行する。
- ❖ 脅威 潮下帯での調査がまだ不十分であるが、岩礁域が卓越する岩手県沿岸では砂泥底は貴重であると考えられ、そのような浅海域の浚渫や埋め立て等によって本種の生息域が減少している可能性がある。
- ❖ 特記事項 本種は、1912 年に北海道の函館とロシアのサハリンから採集された標本に基づき *Nereis dyamusi* として新種記載された。その後、長い間 *Neanthes virens*（タイプ産地：ノルウェー）や *Nereis brandti*（オホーツク海）のシノニムとされてきたが、最近の研究によって函館とサハリンの標本はこれら 2 種とは別種であることが明らかにされ、*Alitta* 属へ移されるときに「*dyamusi*」の種小名が復活された。
- ❖ 文献 10. 阿部博和ほか（2020a）、12. 阿部博和ほか（2020c）、13. 環境省自然環境局生物多様性センター（2007）、16. Kinoshita, Matsumasa（2016）、51 環境省自然環境局生物多様性センター（2022）

（菅 孔太郎）

タキヨコエビ

ヨコエビ目 アゴナガヨコエビ科

Awacaris rhyaca (Kuribayashi, Ishimaru and Mawatari, 1996)

環境省 なし

- ❖ 形態 同属（サワヨコエビ属）のヤマトヨコエビ（*A. japonica*）やエゾヨコエビ（*A. ezoensis*）よりひとまわり大型であり、体長 10～17mm。ヤマトヨコエビに酷似するが、第 1 触角柄部第 1 節後縁に 3 刺毛束を備えることにより区別される。
- ❖ 分布の概要 北海道、本州、隠岐、五島列島福江島。岩手県内では北上山地の三陸沿岸の小河川・溪流に見られる。
- ❖ 生息状況 溪流に生息するが、産卵のみを海で行なう降河回遊性を示す。
- ❖ 脅威 海との連続性が良好な河川の減少。
- ❖ 特記事項 生息地が限定されている。
- ❖ 文献 52. Kuribayashi *et al.*（1996）、53. Tomikawa *et al.*（2017）

（松政 正俊）

ヌカエビ

エビ目 ヌマエビ科

Paratya improvisa Kemp, 1917

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲には眼窩上棘がある。額角は触覚鱗先端に達し、その上縁に6～20本、下縁に0～6本の歯が認められる。体長は3.4cmに達する。眼窩外歯の後方に歯はない。成熟した雄の鉗脚は雌よりも太い。体色は透明で、淡茶色、褐色、緑色の小斑点がある。雄の大型個体では色が濃くなる。
- ❖ 分布の概要 日本固有種。青森以南、近畿地方北に分布し、島根県でも確認されている。岩手県全域で認められる。
- ❖ 生息状況 河川の上流から中流、湖沼に生息する。河川では河岸のヨシ原付近などの流速の遅い場所に見られることが多い。
- ❖ 脅威 外来種のカワリヌマエビ類 (*Neocaridina* sp.) の分布が拡大しており、本県にも侵入した場合には、生活史を淡水域で完結する本種への影響が危惧される。カワリヌマエビ類 (*Neocaridina* sp.) は、滋賀県では「指定外来種」に指定されており、宮城県でも認められている。
- ❖ 特記事項 本種は青森県で「準絶滅危惧種」に指定、山形県で「情報不足」とされている。同属のヌマエビ (*N. compressa*) の分布は北海道、宮城県（太平洋側）や新潟県（日本海側）から南西諸島まで確認されている。岩手県内からの報告は、今のところはない。
- ❖ 文献 44. 豊田幸詞 (2019)、54. 松政正俊・阿部博和 (2023c)、55. 大高明史・木村直哉 (2018)、56. 長澤和也・藤本泰文 (2021)、57. 鈴木正貴ほか (2021)

(松政 正俊)

サワガニ

エビ目 サワガニ科

Geothelphusa dehaani (White, 1847)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は前方に丸みを帯びた四角形で、やや平たく滑らかである。甲幅は約3.2cmに達する。眼窩外歯の後方には痕跡的な切れ込みがある。雄の鉗脚は雌よりも大きく、左右いずれかが大きい。鉗脚は赤色で、指部は白ないしは黄色。体色は茶褐色、赤褐色、紫黒色、灰青色などバリエーションに富む。
- ❖ 分布の概要 青森県から鹿児島県トカラ列島の中の島にかけて分布する日本固有種。
- ❖ 生息状況 河川の上流から中流に分布し、淡水域で生活史を完結する。水がきれいな溪流に生息する。
- ❖ 脅威 生存に適した清流の減少。
- ❖ 特記事項 青森県、埼玉県などの9県が準絶滅危惧や留意等に指定している。
- ❖ 文献 58. 一寸木肇 (1980)

(松政 正俊)

カクベンケイガニ

エビ目 ベンケイガニ科

Parasesarma pictum (de Haan, 1835)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸甲は四角形で後方にむけてわずかに狭くなる。甲幅は約 2.5cm に達する。眼窩外歯の後方に歯はない。鉗脚の可動指上面には、雄では 15～20、メスでは 9～13 個の結節状顆粒が並ぶ。体色は黄褐色や青灰色あるいは黒褐色で、暗色の斑紋がある。鉗脚は黄橙色、指部は黄色。
- ❖ 分布の概要 韓国、中国、台湾、インドネシア、マーグイ諸島からの記録があり、日本では千葉県（太平洋側）・秋田県（日本海側）～南西諸島にかけて分布するとされていたが、近年宮城県で確認され、岩手県では 2021 年に初めて確認された。
- ❖ 生息状況 河口や内湾の潮間帯上部の草地や土手に巣穴を形成して生息。石の下や護岸の隙間なども利用する。岩手県内では陸前高田市でのみ確認されている。
- ❖ 脅威 水域から陸域への連続性が良好に保たれた生息環境の減少。
- ❖ 特記事項 生息地が限定されている。
- ❖ 文献 17. 松政正俊ほか（2023a）、44. 豊田幸詞（2019）、45. 松政正俊ほか（2023b）、59. 鈴木孝男ほか（2022）

(松政 正俊)

ヤマトオサガニ

エビ目 オサガニ科

Macrophthalmus japonica (de Haan, 1835)

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸部は横長・背腹に扁平。甲幅は成体で 3.5cm に達する。眼柄は長く甲の全面のくぼみに収納できる。同属のヒメヤマトオサガニに似るが、本種の頭胸部の方が横に長く、大型になること、第 3 歩脚の前節に軟毛がないこと等で区別される。また、雄が大型の鉗脚を振り上げる「ウェービング」の様式も両種で異なる。
- ❖ 分布の概要 青森県陸奥湾から鹿児島県種子島、泥干潟の潮間帯下部に生息。
- ❖ 生息状況 潮間帯下部の泥質干潟に巣穴を持ち、干潮時に巣穴から出て採餌や求愛等の社会行動を示す。2022 年に岩手県最南の広田湾内において繁殖が確認され、その後も個体群が維持されている。
- ❖ 脅威 広田湾内の個体群では密度が増加しているが、岩手県においては広田湾以外では、確認されていない。
- ❖ 特記事項 生息環境・生息地が限定されている。
- ❖ 文献 43. 松政正俊（2019）、45. 松政正俊ほか（2023b）、60. 松政正俊ほか（2022）

(松政 正俊)

オグマヒモムシ

ハリヒモムシ目 クラテネメルテス科

Nipponnemertes ogumai (Yamaoka, 1947)

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 10cm を超える大型のヒモムシ類。生時の体色は鮮やかな橙色で、頭部には白いバンドなどの模様を欠く。頭部の背面中央は盛り上がり、頭部の両側では多くの眼点が三角形に散在する。
- ❖ 分布の概要 陸前高田市小友浦の潮間帯で 2021 年 7 月に 1 個体が採集された。本種は日本国内のみで知られる種であり、岩手県以外では新潟県佐渡島、神奈川県葉山町、三浦市、静岡県下田市、伊東市、和歌山県白浜町、広島県呉市から 8 例のみの記録がある。このほか、*Nipponnemertes* cf. *ogumai* と同定された標本が新潟県佐渡島から採集されている。以前は太平洋側では千葉県犬吠埼以北には分布していないと考えられていたが、岩手県から発見されたことで北限記録が大幅に更新された。
- ❖ 生息状況 砂泥質の海底上にある大きな石の下に生息する傾向がみられる。小友浦では潮間帯で採集されたが、これまでの記録の多くが潜水やドレッジで採集されたものであり、主な生息域は潮下帯であると思われる。
- ❖ 脅威 ヒモムシ類の中では大型の種であり、砂泥質の海底上にある大きな石の下という特殊な環境下に生息するため生息地改変の影響を受けやすい可能性があるが、全国的に発見例が少なく、どのような要因が生存に対する脅威となるか不明である。
- ❖ 特記事項 本種は暖水性種と考えられているため温暖化により分布が北進している可能性も否定できないが、小友浦産と神奈川県荒井浜産の標本間で mtCOI 領域の塩基配列が 2 % 程度異なっており、東北地方の海域に遺伝的に分化した個体群が存在している可能性も考えられる。
- ❖ 文献 61. 阿部博和ほか (2022d)

(阿部 博和)

アッカホラアナゴカイ

イジマムカシゴカイ目 ホラアナゴカイ科

Nerillidae gen. sp.

環境省 なし

- ❖ 形態 体長 0.5mm 程度の微小な洞窟性・地下水性の多毛類。剛毛節は 8 節からなり、第 1 剛毛節（頭部）には眼点はなく、1 対の副感触手をそなえる。背腹両足枝に針状剛毛が 3 ~ 4 本ずつあることが多いが、その数には変異がある。肛触糸はない。
- ❖ 分布の概要 北上山地の北部に位置する岩泉町の安家洞に生息するとされ、県内外の他の洞窟で採集された記録はない。
- ❖ 生息状況 安家洞一の関右枝上のプールにおいて 1962 年 8 月 9 日および 10 日に 21 個体が採集された記録があり、この記録をもとに新日本動物図鑑においてアッカホラアナゴカイという和名が提唱された。1967 年 10 月 21 日にも同プール群で調査が行われているが、この際には「相当徹底的に採集したにも拘らず 1 個体も採れなかった」という記録が残っている。1962 年の記録以降、これまで採取された記録はない。
- ❖ 脅威 安家洞は、内部の至るところに特殊な地下水性動物をはぐくむのに好適な水溜りが見られ、国内でも地下水性動物の最も豊富な石灰洞の一つとなっているが、本種は数あるプールの中でも一の関右枝上のプールでのみ採集されており、ごく限られた場所の小さい水溜りに生息する。現在では記録が途絶えていることから、他の地下水生生物と比べても好適な生息環境の幅が狭い可能性があり、観光事業に伴う洞穴内の改変工事や近隣の河川改修、道路工事などが行われる際には大きな影響を受ける恐れがある。
- ❖ 特記事項 和名が提唱されているのみであり、分類学的な検討や記載は未だ行われていない。
- ❖ 文献 62. 上野俊一・森本信義 (1962)、63. 上野俊一 (1965)、64. 今村泰二・森本義信 (1969)

(阿部 博和)

ナンヨウスナガニ

エビ目 スナガニ科

Ocypode sinensis Dai, Song and Yang, 1985

環境省 なし

- ❖ 形態 頭胸部は立方体に近く、成体の大型個体で甲幅 3.2cm 程度となる。左右の鉗脚のいずれかが大きく、両眼の先端に角状突起はない。甲背面後部に斑紋を持たないこと、鉗脚内面に顆粒列が見られることからスナガニやツノメガニと区別される。
- ❖ 分布の概要 南方系種であり、紀伊半島から沖縄にかけて分布すると言われていたが、北限記録が近年更新されており、若林（2019）が宮城県石巻市で記録している。岩手県では、2022 年に幼体 1 個体が南部の砂浜で確認された（松政・菅 準備中）。
- ❖ 生息状況 汀線から離れた潮間帯上部・後浜の植生帯を主な生息場所とするが、幼体は汀線付近など潮間帯のより低い場所にも生息し、スナガニとの競合が考えられる。
- ❖ 脅威 個体群が成立していたとしても、極めて脆弱な状況と考えられる。
- ❖ 特記事項 今後、岩手県が分布北限となる可能性がある。
- ❖ 文献 45. 松政正俊ほか（2023b）、49. 渡部哲也ほか（2019）、50. 若林郁夫（2019）、65. 和田年史・和田恵次（2015）

（松政 正俊）